

には、先生の嚴密なる校訂を願う筈になつてゐたのであるが、何分急に逝かれたので惘然として居るやうな始末です。私は我が國の湖沼學上から、此の美術家を失なつたことを、くれぐれも、歎ずる次第であります。

## 水彩畫の教育家

中 村 不 折

大下君は、畫も旨かつたけれども、夫よりか、繪の教育に大變骨を折られて、そして其方で現はれて居ることは、誰でも知つて居ること、今更我々め喋々を要さぬ、然し世には其教育と云ふことを利用して、自分の野心を充たすことに汲々として居る人も澤山にある、そして彼方此方、地方へ出て講習などやつて居ると、自分の家の金庫を充たすと云ふことが、目的であつて、美術の普及とか、斯道の爲とか云ふ様な人が少ない、大下君は性質が淡泊で、度量が廣く、夫で人と争ふたと云ふことがない、誰に對しても春風の吹いて居る様な、温乎として、玉の如しとでも形容すべき風采であつた、美術、取り分け水彩畫の教育には非常に趣味を持つて居つた、殆ど先天的とでも云ふ有様であつて、日本國中を駆け廻つて歩いて、有志の青年を集めて、講習をしたり、雑誌を發行して、夫れ等の人々の便宜を謀つたり、研究所を建て、子弟の養成に盡力したのである。到頭そゝ云ふことに盡力して居る内に、病を得て、倒れて仕舞つた、これは云はゞ軍人が戰死したと同じ事である、夫で平素大下君が、そゝ云ふことに奔走せられて居ることは、我々の様な、不精な、自分の好きな畫計りかいて居つて、子弟の教育なんかを、度外視して居る身では、常々大下君の行動を見て、愧ぢて居たのである、其最後を見て、一層尊敬の念を増したのである。

雑誌「みづゑ」も、本號を以て終りとするそゝであるが、僕は誰か後繼者を得て、永續させたい希望である、然し目下の事情、夫が出來ずとすれば、一時休刊して、外に丸山君が歸られた上か、又は誰か特志の人が出て、其跡

を繼がれんことを切望に堪えぬのである。

## 藝界の最新思潮者

戸 張 孤 雁

大下氏の死は、餘りに突然なので、今が今まで、自分の物だと確く信じて、大切に居た或るものを、急に他から持主が現れ、アツケニとられてなす事を知らぬ間に、さつきと見返りもせず、夫れを取つて行かれて仕舞た様で、私の心の調子は亂れて、今尙ほ如何して善いのか、自分ながら解り兼ねて居る次第であります。せめて私の感じた氏の印象を、新聞にでも書いて後世先生を研究なさる人の、一助にもしたいと考へて居るのですが、心の調子が整はないので、未だそれにも手を付けずに居りました、處が春鳥會から雑誌「みづゑ」も先生の逝去なされたと共に、廢刊になる、就ては最終記念號原稿×切に間に合ふ様、何か書けとの通知兼御命令がありました、大下氏の記念號、夫れに加へて今迄しばし、稿を寄せた永きなじみの雑誌の最終號、私は私の心が整はぬとて、此儘に過すのは云ひしれぬ哀しみの上に、尙一層心に痛みを覺えますのでせめて、一言でもと思つて筆を採る事と致しました、萬一故人に、其の他の方々に、失禮に當る點が御座いましたなら、未だ私の心の調子が整はぬ故と、御許し下さる様、始めにお願い致して置きます。

氏は洋畫趣味布及に預つて、力ある人なると共に、日本美術復興の先驅者で、明治美術界の恩人であると云ふ事は、誰も異存はない事と私は信じて居ります、美術趣味の布及は、一面美術の發達に、力ある事も、今更私に申上げる迄もない事と存じます。又美術の復興者であると云ふ事も、維新當時の美術の、哀れむ可き有様と、今日とを比較なされるならば私が説明するまでもない事と存じます、然し之れ等の事は、他の御方がお書き下さる事と思つて、私は題名の通り、氏は美術界に於ける最新の思潮を有せられた方だと、云ふ事に就